

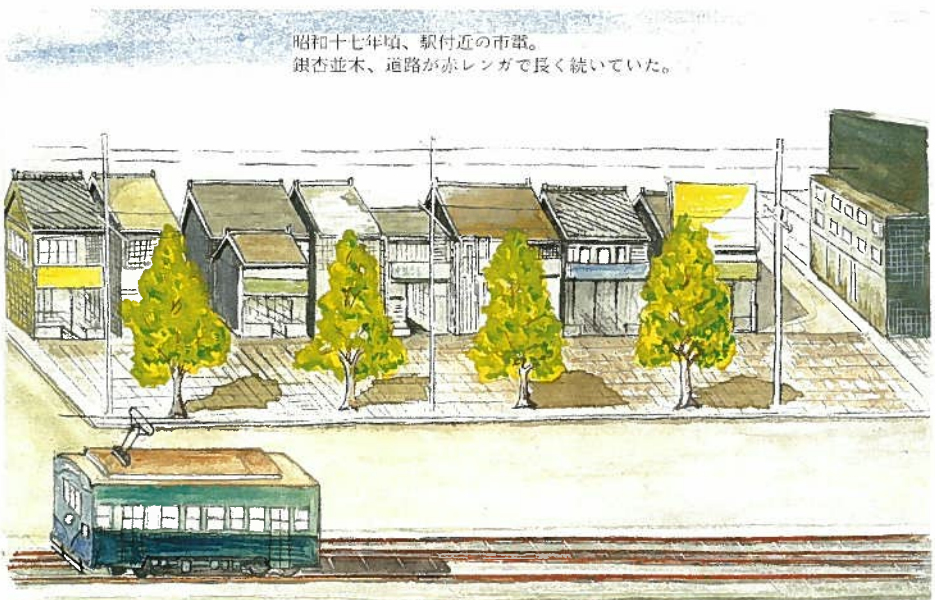
戦争中の秋葉原（昭和十七年頃）

大東亜戦争中の昭和十七年の夏でした。私
が学生の頃、家の近くにラジオ屋さんがあり、
私にラジオの組立指導をしてくれた際、部品
不足だと神田・秋葉原まで出掛け、広瀬商会
や山際電気などを知るようになりました。

当時は町も静かで、道路は「赤レンガ」と
長く続く「銀杏並木」、ガタガタと市電が通
り、人の姿はまばらでした。思い出すのは、
万世橋下の神田川で魚釣りをしている人が、
「ここはボラがよく釣れる。今日のおかずだ。」
と自慢していた姿です。

また万世橋近くの交通博物館の外には「爆
弾三勇士」の像が、終戦後も長い間残されて
おりました。

しかし、昭和二十年三月十日の東京大空襲
で東京はほぼ壊滅状態になり、秋葉原も焦土
と化しました。上野の山から神田駅付近まで
が見渡せるほどの、焼け野原となってしまっ
たのです。



昭和十七年頃、駅付近の市景。
銀杏並木、道路が赤レンガで長く続いていた。

「日本電気（NEC）に入社して間もなく、赤
坂に入隊。その後、千葉県白浜・千倉で、電波探
知機（ブラウン管）によるB29等の機来報告する中
部隊に配属されました。そして終戦。昭和二十年
末まで残って軍用品の整理にあたりましたが、そ
の時私は、電気部品だけをリュックサックに持て
るだけ持ち、ようやく家に辿り着きました。家は
焼け、バラックの建物があるのみでした。」

〈終戦後〉

焼け野原と化した秋葉原でしたが、戦前か
ら店を構えていた広瀬無線、山際電気に加え、
石丸電気、志村無線、朝日無線電気、中浦電
気、ミナミ無線、小野電業社などが続々と秋
葉原で創業。当時既に、「秋葉原は安い」と
評判が地方まで広まっており、全国から仕入
れに来る業者で賑わっていた事が、秋葉原に
電器商を集結させた要因の一つでした。

一方、神田小川町から神田須田町にかけて
形成されていた露店商の中で、真空管を取
り扱う業者が増えていきました。当時、近隣
の電気工業専門学校（現在の東京電気大学）、
の学生がアルバイトでラジオの組み立て販売
をしたところ、飛ぶように売れた事から、露
店商も先を競って扱うようになったのです。

